

# 高校生・大学生のキャリア形成に関する

## 国際比較研究が教えたこと（４）

### 4. 繰り返された結果の解釈

以上3回にわたって、高校生の職業観形成に関する6か国比較縦断調査の実施手続と結果分析、大学生の職業的資質の4か国比較縦断調査の実施手続と結果分析を紹介してきた。調査協力者は高校生と大学生というように対象が異なっていたし、また高校生と大学生の所属教育機関の場所（都市）もやや異なっていたけれども、大筋において、同じような傾向が導き出された。

#### 4-1. 国際比較するといつも日本が低位である理由の考察

ほとんどの職業観尺度、職業基礎力尺度において、日本の生徒・学生のスコアは低位であるか、最も低かった。逆にアメリカの生徒・学生、インドネシアの生徒はポジティブであり、他より高かった。なぜであろうか。

第1に、文化的背景などを考慮しないで結果をそのまま解釈すると、日本、そしてドイツ、あるいは項目により韓国、これら3か国に共通するのは少子高齢化社会、また日韓に共通するのは学歴社会、就職不安の社会ということがあられるかと思われる。とくに日本は現在もっとも低い経済成長下にあり、若者にとって未来を見通しにくくなっているのではないだろうか。

第2に、この種の調査における「自己非開示性」<sup>1</sup>やよく指摘されるタテマエとホンネの使い分けという日本人独特の表現慣習を割り引いて解釈せねばならない。日本人は、あまりストレートに意見、感情を表出しない。

第3に、そのことをよく踏まえた質問・回答（選択）文を用意しておく必要がある。筆者は今になってそのことを痛感する。

#### 4-2. 職業能力と職業観

2つの縦断研究とも全般的にいうと、職業的能力（基礎力）では機会（時間）効果が見られ、職業観では自己実現志向を除き後退するという結果であった。このような傾向は、アメリカにおいてさえ、しばしば見られるという。例えば、Lent, Robert. W. (2008)<sup>2</sup>の工学系学生の自己効力感の縦断研究、Duffy, Ryan D.他 (2011)<sup>3</sup>の医学生の天職観・能力発達の縦断研究である。

2-6で触れたが、生徒、学生にとっては、いかに生きるべきか、とか、どうい

うことに価値をおいて職業生活に入るか、ということよりも（あるいはそれを脇に置いて）、後続の入試、就職、それへの準備としての教養や専門の学習が当面の課題となる。近年、ますます喧伝される基礎力や能力形成が前面に待ち構えている。

ただし、筆者は就職活動がいったん終結したあとの学生の卒業論文研究における旺盛な取り組みもよく承知しているが、就職活動の職業観形成効果についてはあまりきちんと俎上に載せて研究されているわけでもない。今後の課題となろう。

#### 4-3. 職業基礎力や職業観形成に対する効果的活動

筆者らが行った4回（高校生2回、大学生2回）の調査結果において、能力形成には専門の学習、ついでボランティア活動が有効であることが示された。アルバイトはコミュニケーション能力の形成などには有効であるが、他の能力の形成や職業観形成にもそれほど顕著な効果が観察できなかった。インターンシップに至っては経験者が少なく、プラス、マイナスの評価にまで至らなかった。

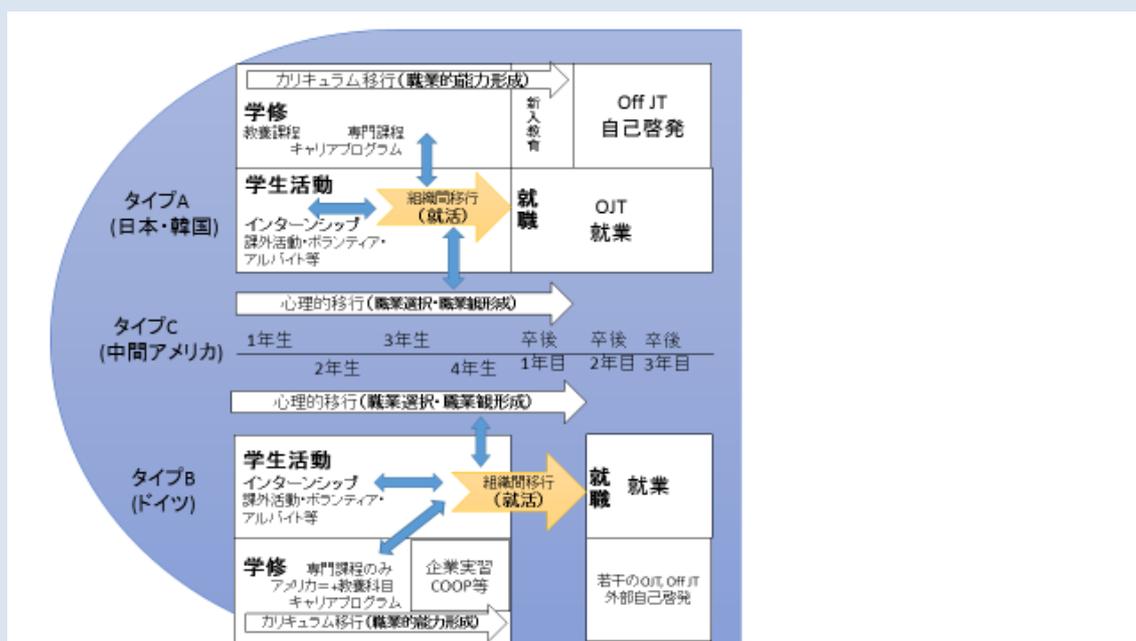
アルバイトに関しては、近年指摘される「ブラック・アルバイト」、またインターンシップについても近年著しい「ワンデー・インターンシップ」の役割など、よく吟味しなければならないことが多い。

### 5. 展望：就職活動を射程に入れて比較研究をする上で

4-2 でとくに日本、アジア諸国の場合を想定して、生徒・学生の在学中の就職活動まで視野に入れて職業に関する能力や観の形成の研究が今後の課題であることに論及した。この部分、特に大学生のそれは大学や、大学のキャリアセンターにとってさえよく見えない事柄である。また、実証的調査研究にとっては、この解明は人事的・秘密事項、高度の個人情報事項に属する事柄なので、いくつかの壁がある。

さらに、欧米諸国との比較研究を考えると、そもそもの労働市場、就職システムの根本的な違いが存在し、欧米では大学側から企業に接近することがほぼ不可能である。つまり、就職ということは、本格的には卒業後時間をかけて行われるからである。アメリカでは、Hopping Group (Hop、Step という非正規職などでの経験ののち Jump して正規職を得る卒業生達)が基本的にメジャーであり、日本のような新規学卒者は Express Group と呼ばれるがマイナーな存

在である。しかも、就職は職種別市場を基本に執り行われる。学校（大学）と職業生活の移行関係を比較労働慣行的に構造化すると、下図のようになる。これらを踏まえ、在学中からと卒業後の就職活動の意義と問題点を抉り出すような国際比較調査を期待している。



## 注記

1. 吉野諒三・角田弘子 (2013) 人のつながりと広がり 稲葉洋陽二編 ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立：重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望.
2. Lent, Robert W. (2008) Longitudinal Relations of Self-Efficacy to Outcome Expectations, Interests and Major Choice Goals in Engineering Students. *Journal of Vocational Behavior*, 73, 328-335.
3. Duffy, Ryan D. et.al. (2011) Calling, Vocational Development and Well Being, A Longitudinal Study of Medical Students. *Journal of Vocational Behavior*, 79, 361-366.

(岡山理科大学 寺田盛紀)